仙台市文化芸術推進基本計画策定に向けたワークショップ

― 開催報告 ―

1 開催概要

【日　　時】	令和５年8月 11 日(金･祝) 13:30～15:30
【会　　場】	せんだいメディアテーク 1階 オープンスクエア
【タイトル】	みんなで話そう！これからのアート ～子どもも、障害のある人もない人も、みんながアートを楽しめるまちにするために～
【主　　催】	仙台市、仙台市教育委員会
【協　　力】	NPO 法人アートワークショップすんぷちょ NPO 法人エイブル･アート･ジャパン 認定 NPO 法人 ST スポット横浜 NPO 法人ワンダーアート 公益財団法人仙台市市民文化事業団
【開催目的】	･「(仮称)仙台市文化芸術推進基本計画」は、市民と共有する初めての計画となることから、計画において目指す方向性や今後重視していきたい取組みなどを念頭においたワークショップを開催し、一連の周知等を通じて、計画策定に係る市民意識の醸成を図ることをめざす。 ･市民、文化芸術関係者、文化施設職員、市職員等がともに学び、仙台の文化芸術の現状認識や課題等を考える場とする。 ･参加者からの意見やアンケート結果を、計画および今後の本市の取組みに生かす。
【実施概要】	･文化芸術による社会包摂をめざす取組みを行っている市内外のゲストによる話題提供とトークセッションを開催した。 ･会場を「対話の場」と「あそびの場」で構成。 ･「対話の場」はワークショップ形式でゲストによる話題提供を受けて、感想･質問･考えなどテーブルごとに意見交換し、その後、会場全体でディスカッションを行った。 ･「あそびの場」は、主に子どもが遊べるスペースとして、NPO 法人アートワークショップすんぷちょによるパフォーミングアーツのあそび場と、NPO 法人ワンダーアートによるビジュアルアートのあそび場を設けた。
(対話の場)	「おはなし」 13:30～14:20 ●(仮称)仙台市文化芸術推進基本計画の策定について 仙台市文化振興課長　佐久間 良樹 ●地域のなかのアートを支える (公財)仙台市市民文化事業団 総務課 企画調整係長 林 朋子 ●【話題提供①】 子どもと舞台芸術が出会うこと －フラットシアターフェスティバルの取り組みから考える－ ゲスト:NPO 法人アートワークショップすんぷちょ 及川 多香子 ●【話題提供②】 アートを通じて生まれるもの －障害のある人･家族･文化事業者の声から－

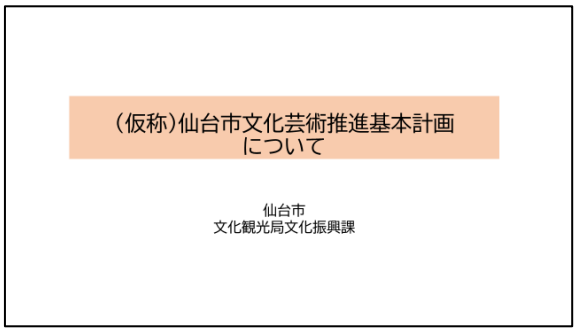
	ゲスト：NPO 法人エイブル・アート・ジャパン　柴崎　由美子 ●【話題提供③】 子どもたちの芸術文化活動を支える仕組み －横浜市芸術文化教育プラットフォームの実践から－ ゲスト：認定 NPO 法人 ST スポット横浜　田中　真実 「感想とおもいの共有」　14:20～15:30　※途中休憩あり（10 分）
（あそびの場）	●道具や楽器を使って、いっしょにあそぼう！ 運営：NPO 法人アートワークショップすんぷちょ ●鳥の声と森の香りのワンダーアートの世界へようこそ！ 運営：NPO 法人ワンダーアート
【対 象 者】	子どもとその家族、障害のある人とその家族・支援者、学校・特別支援学校・特別支援学級・文化施設・社会教育施設・福祉事業所・児童施設等に関わる人、すべての人
【参加者数】	120人 （「対話の場」「あそびの場」合計）

2 対話の場

「おはなし」（話題提供）

・仙台市及び（公財）仙台市市民文化事業団から、（仮称）仙台市文化芸術推進基本計画の策定についての説明と、市の全般的な文化芸術活動への支援を中心とした地域の文化活動の活性化に向けた取組みについて報告した。

テーマ：（仮称）仙台市文化芸術推進基本計画の策定について
話題提供者：仙台市文化振興課長　　佐久間　良樹



（内容）

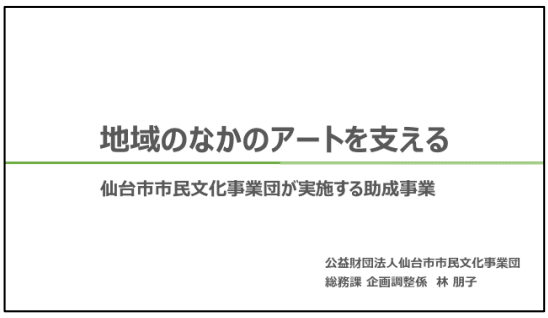
・現在仙台市では、これからの市の文化振興の方向性を示す「（仮称）仙台市文化芸術推進基本計画」の策定に向けた検討を進めている。

・「文化芸術基本法」が 2017 年に改正された。基本理念において、「年齢、障害の有無又は経済的な状況」にかかわらず等しく文化芸術の鑑賞等ができる環境の整備がなされなければならない、とされたことや、文化芸術そのものの振興にとどまらず、他の

様々な分野（観光、福祉、教育等）とも連携しながら、文化芸術を振興していくことなどが改正のポイントとなっている。
・2018 年には、障害の有無にかかわらず、文化芸術を鑑賞･参加･創造するための環境を整えることや、そのための支援を進めていくことを目的として「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が制定された。
・一人一人に文化芸術と出会うチャンスが開かれている必要がある、ということが、法律のなかで示されており、このような国の動向もふまえながら、現在、「計画」づくりを進めているところ。
・仙台市が昨年度実施した「仙台市文化芸術に関する意識調査」では、「仙台市が今後文化芸術の面で力を入れていくべきこと」の第３位に「子どもたちの文化芸術に親しむ機会の充実を図る」が入った。年代別集計の結果を見ると、30 代ではこの回答がトップとなっていて、子育て世代を中心に多くの市民の方から高いニーズがあるものと考えている。
・また、現在仙台市では、新しい音楽ホールと中心部震災メモリアル拠点の複合施設について整備検討を進めているが、音楽ホールのキーワードには「教育と福祉の連携」があり、こうした様々なソフトの事業、取組みについても充実した施設としていきたいと考えているところ。
・今日は、誰もが文化芸術を創造し、鑑賞し、体験できることを目指して活動を続けているゲストの皆さんのお話を聞きながら、「みんながアートを楽しめるまち」について自由に話をし、これからの仙台の文化芸術がよりよくなるように、会場の皆さんと一緒に学び、深めていく時間としたい。

テーマ：地域のなかのアートを支える

話題提供者：（公財）仙台市市民文化事業団　総務課　企画調整係長　林　朋子



（内容）
・仙台市市民文化事業団は、劇場・音楽堂の運営、ミュージアム施設の運営、楽都・劇都事業、市民の文化芸術活動のサポートなど、文化芸術にまつわるさまざまな事業を行っているが、本日はその中から助成事業について紹介する。
・助成事業は、公演や展示、ワークショップなどの文化事業に必要な資金の補助や、広報支援を通じて地域の文化活動を活性化すること、より多くの人が文化に親しめる環境をつくることを目的に実施している。これまで文化芸術活動への幅広い支援を行ってきたが、近年では、コロナ禍におけるアート活動継続のための支援や、地域の課題をテーマにした取組みへの支援など、その範囲を広げてきた。

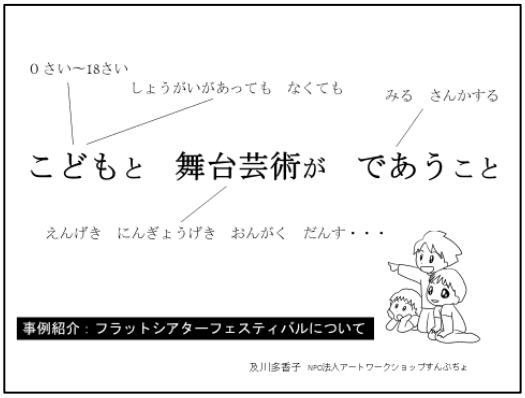
・2021 年度から実施している「持続可能な未来へ向けた文化芸術の環境形成助成事業」における取組みの紹介を通じて、「アートの力を活用して地域の課題に取り組む」ということ、また「地域にアートがある」ということの意味についてお話したい。
・アーティストの門脇篤さんによる、多文化共生の課題にアプローチした取り組みを紹介。同じ街に暮らしているものの、ふだん触れ合う機会の少ない「stranger（異邦人)」を取材し、ドキュメンタリー映画を制作するプロジェクトであり、映像というメディアを通じて、さまざまな文化的背景を持つ人と関わり合い、互いの理解を深めようとする試みを行っている。
・風の時編集部による企画、「ここダネ！」では、まちづくりや教育の課題にアプローチしている。このプロジェクトは、同じ地点から撮影した昭和時代と現在の写真を比較することで、まちの魅力を発見しようというもので、プロジェクトを通じて、世代間交流や、楽しみながら地域を学ぶ機会がごく自然に生まれている。
・市民活動家によるグループ「シーソー（she-sow)」は、アーティスト、古書店の店主、市民活動家によるグループで、身近にある社会問題を自分たちの力で解決していくための勉強会などを行い、情報発信方法に課題を抱える福祉や市民活動の現場にアートの表現力を活かし、マップやウェブサイト等の作成を通して発信している。
・仙台の演劇人、演劇研究舎による事業「てとつてと」は、部員が減少傾向にある高校演劇部の環境改善に向けて、演劇人が直接学校を訪問し、サポートを行うプロジェクト。部活動の困りごとを学校の外から支援している。
・「とっておきの音楽祭」によるプロジェクトでは、手話文化や聴覚障害への理解を深めることに焦点を当てた事業を行った。
・ダンサーの渋谷裕子さんは、聴覚障害のある方も安心して参加できるダンスワークショップ「さぐるからだ、みるわたし」を実施している。またワークショップを通じて、ファシリテーターの育成や、聞こえる人と聞こえない人との交流を深めることにも取り組んでいる。
・本日ご紹介した活動を広げていくためには３つの視点が大切だと感じている。１つめは、多様な主体による活動が、より多くの人・地域にアートを届けるという視点。すでに存在するさまざまな活動者の方への支援を通じて、より多くの人が活動に参加できる、豊かな環境が生まれるのだと思う。２つめは、新たなチャレンジをサポートする仕組みづくりについて。アートを地域に開き、他の分野とも連携していこうとする取り組みは試行錯誤の連続であるため、資金、ノウハウの提供などの支援体制を整えることが、この動きを後押しする大きな力となると思う。３つめは、市民、施設・文化財団、行政の連携づくりについて。多様な主体により生まれた素晴らしい取組みを継続し、さらに広めていくために、市民、公共施設や財団、行政、それぞれが連携しながら、その方法を考えていく必要があると思う。

・市内外で文化芸術による社会包摂をめざす取組みを行っているゲスト３名から、事例紹介を交えながら、子どもと舞台芸術が出会うことの意義や、アートを通じて生まれるもの、及び子どもたちの芸術文化活動を支える仕組みについて説明された。

テーマ：【話題提供①】子どもと舞台芸術が出会うこと
－フラットシアターフェスティバルの取り組みから考える－

（話題提供者）NPO 法人アートワークショップすんぷちょ　及川　多香子

（プロフィール）
文化芸術を用いて、多様な人が交流し、すんぷちょ（宮城の方言で、急須）で淹れたお茶っこを飲むような温かい空間を生み出すことを目的に活動。ダンス、美術、演劇などのワークショップ開催、舞台公演、舞台芸術祭のプロデュースを行っている。



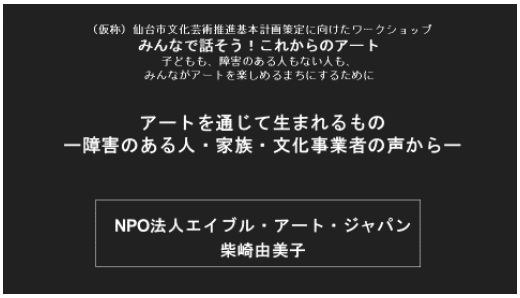
（内容）
・「こども」が「舞台芸術」に出会うことの意義について、演劇や人形劇などの舞台で生の人間、役者によって演じられる、形態の芸術作品を、観る、もしくは参加することは、私たちの生活や人生にどのような影響があるのか、すんぷちょの事例を交えながら考えていきたい。
・「宮城野区子ども舞台芸術祭フラットシアターフェスティバル」は、「宮城野区文化センター」を会場に、２日間、2022 年からすんぷちょが開催している芸術祭。舞台手話通訳がついた人形劇の上演や、言葉や物語を理解できなくても感覚を使って楽しむことができる演劇、多感覚演劇の上演などを行っている。催事のタイトルとなっている「フラット」は、様々なハードルが無い、ということを意味し、地域に住む人たちの文化資本を、年齢や障害の有無関係なく養っていきたいという目的で開催している。また、色々な人と同じ舞台を一緒にみて、感動する、共有体験をすることで、共生社会、みんな地域で一緒に生きているということを知るきかっけも生み出したいと考えている。
・舞台芸術が、映画や、アニメ、配信される音楽と違う点は、「なまもの」である点である。本当の人間が、演じたり、披露するのを、直接観客が同じ空間で見るので、見逃したからといって後から巻き戻し再生ができない。作品が上演される日にち、時間に上演される場所に行って見る必要があり、行ったことがないとその良さがわからず、わからなければ足が向かない。また、上演にも舞台をつくるのにもお金はかかるが、一度に一緒に見られる人数に限りがある…。などと、様々なコンテンツが溢れる昨今に

おいて、舞台芸術と出会うことはハードルが高く感じられるが、それだけ体験による価値が高いとも考えられる。
・同じ空間にいるからこそ感じる、演じる人の息遣い、空気、匂い、会場の雰囲気があり、五感をフル動員するので、深い芸術体験をもたらす。心が動く、感動することは自分のことをよく知るきかっけになる。そして自分のことをよく知ることは生きていくうえで大事な指針になる。
・舞台芸術を楽しむためのハードルを超えていくために最も大事なことは、「子どもの時の原体験」だと思う。私たちの生活や行動に染みついている、慣れ親しんでいるものは、実は自分で選びとったものよりも、成り行きで出会ったもの、環境の中で養ったものが多い。
・こうした環境や成り行き、選択肢をもっと豊かにしていくために、「文化行政」という考え方がある。仙台市内の子どもたちが、舞台芸術をはじめとする文化芸術に出会うために、これからどのような取組みや仕組みがあると良いか、子どもたちの文化芸術体験を支えるために何が必要かを考えたい。
・すんぷちょが必要だと思うことの１つ目はアウトリーチ活動。学校施設、保育施設、外出が困難な子どももいる病院などに、芸術家が出向き、舞台芸術との出会いを作るものである。仙台市内では、震災後特に、文化庁の事業として、被災地を中心にたくさんのアウトリーチ活動が行われてきた。
・２つ目は劇場やコンサートホールなどでの公演で、シリーズやフェスティバルだとなお良い。１年の中で、テーマに沿って、演目を変えて開催するシリーズの良いところは、１回の体験に終わらず、次も参加してみようという予定を立て易い点。また作品と作品を比べることによって、子どもたちの中にも好みや尺度が生まれ、舞台作品を楽しむ力、比べながら見る力、感性が育つ点である。さらにシリーズで大事なことは設定するテーマはその地域に住む人々の声から生まれるということ。
・３つ目は鑑賞や参加以外の目的で関わり合うことで、多様な繋がりを生むというもの。例えば、公演のお手伝いなどにボランティアとして関わることや、公演が無い日に劇場を子どもたちの居場所として解放することなどがある。
・最後に、「子どもと舞台芸術の出会いが地域にもたらすものとは何か」について。子どもの時に、舞台芸術との関係が複数あることは、大人になってからの生きがいづくりや、生きる楽しみに直結する。また観劇人口が増えることで、公演や文化事業の質、量共に盛んになり、文化振興と、地域の活性化につながると考える。

テーマ：【話題提供②】アートを通じて生まれるもの
－障害のある人・家族・文化事業者の声から－

（話題提供者）NPO 法人エイブル・アート・ジャパン　柴崎　由美子

（プロフィール）
障害のある人たちとともに、おもに芸術文化活動のチカラを通じて共生社会づくりに貢献。東北事務局は 2011 年から活動をはじめ、現在は、オープンアトリエの運営、生涯学習事業の展開を中心に、障害のある人たちの創造・鑑賞・発表・販売/二次利用・交流を促進する中間支援を行っている。



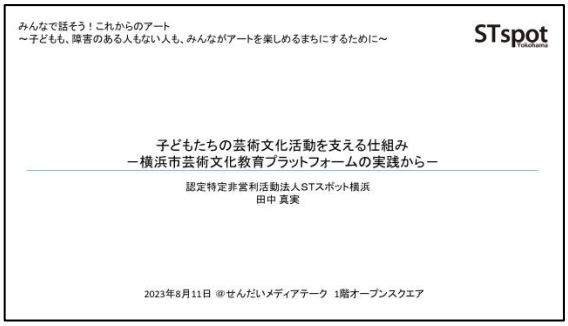
（内容）
・本日お伝えしたいことは大きくは２点。１点目はすべての人は、生まれながらにして文化芸術を創造・享受することを権利としてもっており、年齢、障害の有無、生活困窮、国籍など関係ないということ。２点目は芸術文化、アートのチカラについて。
・なかでも、本日は２点目の芸術文化、アートのチカラに関して、障害のある人、家族、文化事業者はどのように感じ、考え、行動しているのか、映像や事例に基づいてお話したい。１つ目は「創造の機会の拡大」に関することで、私たちが行政と連携して実施した文化プログラムに対して、当事者や家族はどのように感じ、考えたのかということ。２つ目はそのプログラムを担当していた仙台市市民文化事業団の職員が、新たに企画したコンサート、「鑑賞の機会の拡大」についてご紹介する。
・当事者や家族がどのように感じているのか、ということについてお伝えするために、これから皆さんに映像をご覧いただきたい。この映像は仙台市と連携して行った「仙台市文化プログラム」の取組みを記録したもので、特に障害のある人が表現活動をする、その環境づくりに関わるものである。2018 年から４年間活動を続け、この映像は 2021 年に記録として作成した。ここから３分程度抜粋してご覧いただく。
****
(映像「SHIRO Atelier&Studio ―ともにつくる芸術劇場―)
【障害のある子どもの家族のお話】
・学校やデイでは体験できないことを、たくさん体験させてもらい、すごく出会いが多かった。（子どもの）心の成長として、人とのコミュニケーションなどにとても自信がついたなと思う。まず表情が違い、また私（家族）ではなく、たくさんの方たちに自ら関わっていくという場面が見え、そうした行動からも自信が溢れているなと感じた。
・（子ども）を応援してくれる人がたくさんいることがすごく嬉しかった。私自身（家族）も知らなかったところを発見できて、すごく感動した。

【障害のある当事者（成人）のお話し】
・子どもは、私が変なことをしても気にしないでいてくれるため、子どもたちと遊ぶのは楽しい。
・最初に（この場に）来たときは訓練だった。人に会うのに慣れる訓練のために最初はずっと来ていた。でも今は、人と会いたくて来ている。人が嫌いだったが、人が好きになった。いじわるする人がいなくて、失敗しても怒られないし、ここは楽しい。
****
・芸術文化が単にモノを創造するというだけではなく、例えば家族以外の多くの人との繋がりをつくる、あるいは学校という教育の場やデイサービスという福祉の場だけでは見えなかったような、その人の可能性を発見する友人たちを得ることができる。また、人が嫌いだった人が、ここで素直に自分自身をさらけ出し、安心して自分らしくいられる場所を見つけることができる。というように、単にモノを創る、発表するということ以上の新しい価値が、皆さんの言葉から聞き取れたのではないかと思う。
・次に、この文化プログラムに参加していた市民文化事業団の職員が自ら行動し企画したプログラムについてお話したい。この職員は、文化プログラムを担当したこと等を通じて社会包摂を意識した事業を実施する必要性を感じ、2022 年、仙台クラシックフェスティバルの関連企画として、小さな子どもや障害のある人もない人もみんなが参加できる機会を作りたいと「リラックスコンサート」を企画した。
・仙台市主催の既存事業に「障害のある人と付き添い者」を対象にしたコンサートはあったが、リラックスコンサートは「障害のある人もない人も一緒に時間を過ごせる場になるように」と方針を考えた。また先進事例を視察し、どんな対応や準備が必要か、実際に目で見て企画に取り入れていった。私たち障害者芸術活動支援センター@宮城（SOUP）も広報や申込受付、座席の割り振りや当日の運営など、様々な面で協力、アドバイスを行った。
・コンサートの 260 人の定員に対して、610 人もの応募があり、その約 2 割である 131 人が、障害のある人と家族・支援者であった。当日は 2 回公演で計 280 人、当選確率は約 4 割となり、リラックスコンサートへの高いニーズが伺える結果となった。
・来場者のアンケートには次のような声が寄せられた。「手振りや身振りをして良いと、リラックスできて音楽コンサートを楽しめるので良かった」「重度の障害を持つ娘は、音楽が大好きで、音楽を聴いているときは穏やかで笑顔になれた。今回初めて本格的なオーケストラですてきな音楽を聴かせていただき、貴重な体験をさせることができ、本当に幸せだった」
・一方、アンケートの「ホールでコンサートを聴いたことがありますか」という鑑賞経験の質問に対して、「今回初めて」と回答した人が 43%おり、その理由の多くは「周りに迷惑をかけるから」という回答だった。周りの目を気にして鑑賞を諦めてしまうという人がたくさんいるという現状が分かる結果となっている。
・事例の紹介を通じ、行政、市民文化事業団、NPO が協働して少しずつ環境が変化しているということを今日は皆さんにお伝えしたい。後ほど皆さんとディスカッションをする時間があるが、勇気を持って映像に出てくださった障害のある方のご家族や当事者、また自ら感じたことを実践に移した文化事業団の職員の方の姿や声を通じ、これからの文化芸術推進基本計画について、議論を深めていけると嬉しく思う。

テーマ：【話題提供③】　子どもたちの芸術文化活動を支える仕組み
－横浜市芸術文化教育プラットフォームの実践から－

話題提供者：認定 NPO 法人 ST スポット横浜　田中　真実

（プロフィール）
アートの持つ力を現代社会に活かすことをミッションに、小劇場・ＳＴスポットの運営、学校や福祉施設への芸術家派遣、地域のアートプロジェクト支援などを行うＮＰＯ。横浜市や神奈川県と協働し、芸術文化分野での中間支援を行っている。



（内容）
・今日は横浜市芸術文化教育プラットフォームという学校に芸術家が出かけていく取組みについて紹介したい。
・横浜市は、子どもたちが自分で文化施設へ出かけていくことが難しい地域も多い。
・子どもたちに対して芸術文化の体験をどのように保障していくかという考え方から、芸術家の方から学校等へ出かけていく取組みが始まった。
・活動は 2004 年から始まり、少しずつ取組みを広げ、2008 年から制度化がされて行政と民間が連携して事業を行うかたちとなった（横浜市芸術文化教育プラットフォームの設立）。事務局は、ST スポット横浜、横浜市芸術文化振興財団、横浜市にぎわいスポーツ文化局、横浜市教育委員会で構成。
・音楽、演劇、ダンス、美術、伝統芸能という５つのジャンルと、体験型・鑑賞型という２つの形態で用意している。
・クラス単位、学年単位とか非常に小さい単位での活動にしている。横浜市には大きな音楽ホール、「横浜みなとみらいホール」があり、小学生は必ず１回は神奈川フィルハーモニー管弦楽団の公演を鑑賞する機会があるため、小さく身近なところで鑑賞してもらったり体験してもらったりする機会としてこのプラットフォームの事業を行っている。
・劇場や美術館に一度も行ったことがない子どもたち、または経済的な状況により機会を持てない子どもたち、劇場等へのアクセスにハードルがある子どもたちにも、学校に出かけていけば出会うことができる。そのため、子どもたちに芸術文化を届ける最低限の保障として、プラットフォームの必要性を感じている。
・横浜市立の小学校・中学校・特別支援学校、義務教育学校の約 140 校で取組みを行っている。横浜市は学校数が約 500 校あるため、３割程度しか行けていないという現状。
・コロナ禍において、ロックダウン状態の時期に調整ができなかったことにより結果

として実施の数は減ったが、学校からはぜひ実施してほしいという強い希望もあった。学校の外の行事、例えば修学旅行などの学校行事が軒並み中止になっており、学校に来てくれるならなんとか実施したい、という意見をいただいたたことが強く印象に残っている。

・学校に芸術家を派遣する仕組みについて説明すると、まずは学校の先生からの希望を事務局代表の ST スポット横浜に集約する。それを受け、地域の文化施設やアート NPO をはじめとする芸術文化団体の皆さんに担当を振り分けてお願いするという形式を取っている。この皆さんを「コーディネーター」と呼び、コーディネーターが学校の先生やアーティストの間に立ち調整作業、実施まで行っている。事務局からアーティストの指定はせず、子どもたちに近いコーディネーターや学校の先生たちにも決定権・裁量権をなるべくお渡しするということを、事務局では大事にしている。

・コーディネーターは芸術文化団体が 10 団体、横浜市内の芸術文化施設が 27 団体、事務局構成団体２団体で構成されている。

・仙台市にも「芸術飛行船」という東日本大震災をきっかけに国の支援のもと始まった芸術家の派遣事業がある。この取組みでは、芸術家の派遣場所を、学校、保育園、幼稚園、PTA の行事等も対象とし、学校以外にも対象を広げていたのがすごいなと思っていたが、今年度からは学校のみに縮小されてもったいないと思った。全部を国でまかないきれるわけではないため、例えば国の制度を学校への派遣に活用し、未就学の子供たちをカバーするために宮城県や仙台市の独自の制度を作って行っていくことも方法の一つなのではないかと思う。保育園、幼稚園など未就学の子どもたちに向けての取組みは横浜市ではまだできていないが、子どもたち全般をカバーしていくことが必要だと思う。

・最後に「コーディネーター」についてお話したい。学校現場に出かけていくと、子どもたちの背景や状況など色々なものが見えてくる。ただ学校に出かけていくだけでなく、その地域に必要なことを考えたり、福祉に繋げていったりするなど、分野を超えて考えていくことがコーディネーターの仕事なのではないかと考えている。教育を学校関係者のものだけにしない、福祉を福祉関係者のものだけにしない、文化についても文化関係者のものだけにしない、そうした様々なことを皆さんが一緒に考えていく状況を作っていくことが必要であると考えている。

3 感想とおもいの共有

・話題提供をもとに、「対話の場」の参加者がテーブルごとに分かれて意見交換を行い、その共有と会場全体での意見交換を行った。

【全体進行・ファシリテーター】

アートワークショップすんぷちょ　及川

仙台市市民文化事業団　　北野

テーブルごとの意見交換

テーブル１
テーブルファシリテーター：仙台市市民文化事業団　林
（主な意見） ・子どもたちが文化芸術に触れる環境をどのように増やしていくか。今、学校で行われている鑑賞体験等の機会も、当日学校を休んだらその機会を逃してしまう。小さいときの文化芸術体験を増やしていくことが大切。 ・情報発信について。仙台市内でもたくさん良い活動がされているが、情報を必要としている人にどれだけ届いているのか。情報を受け取りたい人と届けたい人をどうつなげていくかという課題がある。 ・学校の部活のような限られた年齢で目的が一つの場所に集まることを窮屈に思う人もいる。部活だけではなく色々な人が自由に集える場所があり、自由に文化芸術に触れられる場があるとよい。

テーブル２
テーブルファシリテーター：ST スポット横浜　田中
（主な意見） ・他分野の人たちと連携が大切だと思うが、どこから始めたらいいのか。 ・話題提供の中で芸術家のアウトリーチの事例が紹介されたが、その場合どうしても、例えば視覚障害のある方のもとへ出かけていく場合は、視覚障害の人たちだけを対象とした場となる。芸術文化は、みんなが出会える場をつくることにも機能していくのではないか、またそのような場をどうしたらつくることができるのか。 ・様々なアイディアが出てはいるが、そうしたものをどのように施策に、計画に反映していくのか、その窓口、糸口をどうしたらつくることができるのか。

テーブル３
テーブルファシリテーター：エイブル・アート・ジャパン　髙橋
（主な意見） ・話題提供者の方々からの発表を通じ、芸術文化活動を色々な人に開いていく活動について、具体的に見えてとても良かった。一方で仙台市で計画中の音楽ホールと中心部震災メモリアル拠点との複合施設で行う事業の中身はまだ見えて来ない。 ・今回のワークショップのタイトルに「みんなで」とあるように、障害のある人ない人を分けるのではなく一緒にやることが本筋なのではないか。 ・リラックスコンサートのような、誰もが行きやすい場をつくることを進めていく一方で、一般的なイベントでも参加できる雰囲気づくりも必要なのではないか。 ・コンサートのあるその日にホールへ車椅子で行くというのはハードルが高い。本当の意味でのバリアフリーを考えてほしい。

全体での意見交換

【　　】発言者　　及川：アートワークショップすんぷちょ
≪　　≫進行　　北野：仙台市市民文化事業団職員
　　柴崎：エイブル・アート・ジャパン
　　田中：ST スポット横浜

（内容）
≪及川≫
・子どもたちにどう文化芸術に触れる機会をつくるか、情報発信（どうやって機会やきっかけをつくるか）、どんなバリアフリーが具体的にあるといいのかと、大きく分けて３つのキーワードにまとめられるのではないかと思う。
・はじめに、機会やきっかけについて会場の皆さんにも聞いてみたい。仙台市で実施している文化芸術派遣事業について、今年度から学校以外の保育所や幼稚園などが対象外となったが、本事業についてコーディネーターをしている方が本日いらしているので、話を聞いてみたい。
【参加者１】
・昨年までは、文化庁からの東日本大震災対応の特別な枠組みで、保育所や幼稚園などの未就学児を対象とした施設やシェルターなど一般的には訪れる機会が少ない施設にも足を運び文化芸術を届けることができて良かったが、今年度から縮小されて学校のみが対象とな

ってしまった。中には、アートに触れる機会がほとんどない子どもたちもおり、芸術家自身がそうした現場に出向くこともまた貴重な機会である。仙台市や宮城県には独自で予算を確保し、学校以外の場にも芸術家を派遣し、子どもたちに文化芸術に触れられる環境をつくってもらいたい。

≪及川≫

・アーティストは個人事業主や任意団体が多く、小さな施設にも足を運びたいという意欲があっても、相手方からは「誰ですか？」と言われてしまうことがあるが、文化庁の派遣事業であれば、とてもスムーズに受け入れてもらえる。また同時に、この取組みはアーティストの仕事の支えにもなるという側面も持っている。今後、今まで全国に先駆けて実施してきた取組みを、言わば仙台モデルというかたちでどうやって残していくかを考えていく必要がある。

≪北野≫

・横浜市の芸術家派遣事業では小学校の割合が多いが、仙台市は実績では小学校への派遣が少ない。横浜市で行っている工夫があれば教えていただきたい。

【田中】

・前年度の３月中に募集を開始していることが大きいポイント。国の動向次第で事業がなくなったりしないように、自治体として基盤となる事業を持っていることが大事で、そこに国の事業を活用してかさ上げするような事業展開がよいと思う。

≪北野≫

・年度をまたぐと先生たちの異動もあるため、学校が次の年度の行事計画を考える際（前年度）に、芸術家派遣事業がメニューの１つとして組み込まれることが望ましいということを確認できた。

≪及川≫

・次に、情報発信の方へ話を振り向けたい。仙台市の芸術家派遣事業「芸術飛行船」のようなものがあったとしても、その情報をキャッチできなければ対象者のところには情報が渡らない。仙台市内で活動を展開している柴崎さんに、情報発信についての課題と感じていることなどがあればお話しを伺いたい。

【柴崎】

・2018 年に実施した仙台市文化プログラムの実施の際に起きたことをお話したい。広報のチラシは当然、仙台市内にある特別支援学校に届いていると思っていたが、結果、仙台市立の学校には届いていたが、市内にある県立や国立の特別支援学校には届いていなかった。県立等の支援学校にも仙台市に住む障害児童が多く通っているという実態があるため、翌年以降は宮城県にも協力を働きかけて改善した。話題提供の中でご紹介をしたリラックスコンサートの広報の際にも、後援に宮城県教育委員会に入ってもらい、県立の支援学校にも情報が行き渡るようにした。壁を越えていく方法はあるが、本当に時間と手間がかかると感じている。どの事業体も利活用できる仕組み、広報の方法を考えていきたいと思っている。

・情報をキャッチする力については、例えば子どもの場合は親がどれだけ情報をキャッチできるかということに左右される。家庭状況等によって、障害のある人たちの中でも様々な事業へ参加する機会に差が生じていると思う。

・義務教育以降の障害のある人たちが家族の元を離れ、グループホーム等の第三者の機関に委ねられた場合、その後の機会は、その事業所の方たちに、スポーツや文化芸術に子どもの

ときと同じように関わりを持たせるという意識がどれだけあるかということにかかってくる。福祉と連携し、支援計画を作っている相談支援やマネジメントをする人たちとも、文化権に関わることを共有していくことが必要だと思う。
≪及川≫
・参加する、しないは自由かと思うが、まずは環境が整っていること、意思を表明できない障害のある人の意思決定を支える人が周りにいることが大切。
・次に、情報が仮に、皆さんに行き渡ったとして、イベント等に出かけていこうと思ったときに、ハード面ソフト面におけるバリアフリーについて、多様な人が出かけていける体制が整っているかどうか、どんなことが必要と感じているのか、本日参加している障害のある当事者の方からお話を聞いてみたい。
【参加者２】
・私は聴覚障害者（全聾）である。自分の声を聞いたことはないが、聴こえる方たちの前では聞き取りやすい声で話すようにしている。
・昨年の５月に国の法律として、「障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法」が成立、施行されている。一昨年、宮城県では「手話言語条例」が制定された。仙台市でも、「仙台市障害を理由とする差別をなくし障害のある人もない人も共に暮らしやすいまちをつくる条例」というものが施行されている。それにも関わらず、イベントや文化施設において手話通訳等の情報保障に関するバリアフリーが整っていない。イベントの主催者側に手話通訳者や要約筆記者を派遣するための費用負担をさせることは、本当のバリアフリーなのか、と思う。さまざまなイベントの現場の対応が追い付いていない状況があると思う。
・身体の面でいうと、イベントやコンサートに参加する際に事前に車椅子である旨を伝えたところ、主催者側が手動の軽い車椅子と勝手に想像し、電動車椅子や寝台車椅子という想定をしておらず、スペースが足りない、重量に耐えられないということがあった。主催者側はそんなこと「聞いてないよ」と言うが、それはこちら側（障害のある当事者）も同じである。
・問い合わせ先が電話番号だけであることも、聴覚障害、言語の障害、発語に問題がある人にとっては大きなハードルとなる。
・本当の意味でのバリアフリーとは何なのか皆さんに考えてほしい。
≪及川≫
・せっかく法律や条例ができても、現場の人の対応力、末端までルールが整っていないと当事者が困るという現象が生まれてしまう。このようなことを想定した条例や計画というものが必要なのではないかなと思う。
・今のお話を伺って、他に、テーブルの皆さんからお話されたいことなどがあればいかがか。
【参加者３】
・私は車いすに乗っているが、現状はどうしても、みんなが参加できるコンサートというように設け、会場を作らなければならない。根本的にはそこを考えないといけない。
・環境を整備するにしても、色々な状況があるので、全てに対応することは難しいが、個人で、人対人で対応することで解決できる問題もたくさんあるので、私たちはそれを、目標を持って、目指していく必要がある。
・先ほど、「周りに迷惑をかけるから」という理由で鑑賞を諦めるという実態があるという報告があったが、そうした声がやはり多いので、それについてもやはり、多くの人がそうし

た状況にあるということをオープンにしていかないと、社会に広がらないと思う。それによって結局は、障害者が障害者向けの場所にしか行けていないと思っている。そこに切り込んでいく必要があると思う。
≪及川≫
・環境を整えていくという点で大切なことは色々とあると思うが、例えば情報保障として、手話通訳がすべてのイベントに当たり前にあるという状況であれば、どのイベントに行こうかと障害のある人は選んで行くことができる。このことが大切なのだと思う。
・私たちもイベントの際に、サポートの必要な方がいらっしゃるかどうかを事前に伺い、どのような対応をしようかと考えることがあるが、すべてに対応できるような人材が配置されていて、情報保障としては条例に則った形で当たり前に準備していくということができるとよいと思った。
・情報保障を様々な活動に浸透させていくということを考えた場合、手話通訳者の手配など情報保障にかかる費用について、小さな主催団体が資金を集めて実施することは現実的には厳しい。そういった点について計画の中に支える仕組みがあると、情報保障について一歩進むのではないかと思う。
≪北野≫
・その他、テーブルの皆さんからご発言されたいことなどがあればいかがか。
【参加者３】
・私は見た目は障害を持つ人には見えないと思うが、発達障害・精神障害を抱えている。
・見えない障害にも目を向けてほしいと思っている。障害にも様々あり、決してどれが一番大変、ということはないが、目に見えない障害は対応が難しいのではないかと思っている。
・見た目が普通であっても、うまくしゃべれなかったり、集団で活動しているときに行動を合わせられなかったり、体調不良を起こしたり、気持ちのコントロールがうまくいかなかったり、大変な思いをしている。学生のときは全然話をすることができず、周りの反応で悲しい思いをしたこともあった。
・そういった障害があっても、色々な人と関わりたいと思っている。精神・発達障害のある人に向けたワークショップ、交流会、限定でなくてもよいが、そういうものがもっとあれば良いなと思う。
・話題提供のスライドショーを、なるほどと思いながら見ていたが、精神・発達障害のある人についてはあまり取り上げられていない印象を持った。見えない障害への配慮、そういった人たちへのサポートも考えてほしい。
≪及川≫
・「見えない障害」、様々なものを抱えている人がいらっしゃるということについて、どれだけ日々想像力を働かせて日々生活できるか、ということだと思う。そういった人たちへの配慮が持てる人を育てていくために文化芸術という分野の枠を超えて、インクルーシブな場を広げていけるかということにも関わってくるかと思う。
・まとめにつながるようなお話をいただいたところだが、最後にこれだけは言っておきたいという方がいらっしゃればいかがか。
【参加者４】
・今日のお話全体を聞いて、東日本大震災で被災した経験、とても大きなショックを１２年前に受けたということは、ものすごく可能性を秘めているのではないかと思う。被災した人

も見た目ではわからない。仙台市民全員被災した経験があって、その大きさは比べても意味がない。我々仙台市民は、その経験をみんな分かち持っているのだと思った。
・これから策定する文化芸術推進基本計画に関して、仙台市のスタイルで仙台市の持っているポテンシャルを活かしていくことが、国の文化政策を決めていくのだという印象を受けた。
・縦割りに横串をさすうえで、コーディネーターがとても大事なキーマンだと感じた。連携を難しくしているのは、これまであった社会の秩序や枠が邪魔をしているだけで、自分たちで決めてしまっている従来の枠組みをちょっとしたきっかけで取っ払ってしまえれば、うまくいくのではないかと感じた。
≪及川≫
・目に見えないこと、過ぎ去ってしまったこと、大きかったけれど意識が遠くなってしまったものを一度見つめなおしてみたり、自覚的になってみたりすることで、今の仙台市やこの社会に必要なことが見えてくる、ということはきっとあると思う。
・本日出されたたくさんの意見をもとに、みんなで作っていく仙台の文化行政ということで、これからもお話し合いを続けていきましょう。
・最後までお話合いに参加していただきありがとうございました。

記録：美術作家　佐竹　真紀子

4 あそびの場

【あそびの場①】NPO法人ワンダーアート

難病や重度障害の人たちが入院する病院や、震災があった所にアートプログラムをはこんでいる。平日は障害のある人たちのアートの仕事場、週末は障害のある人もない人も通えるアートスタジオを開いている。

ビニールボール、描ける床などを用意し、自由にペイントをして遊べる場を設けました。

【あそびの場②】NPO 法人アートワークショップすんぷちょ

多感覚演劇「フェスタ！」チーム…多感覚演劇は言葉や物語を理解しなくても楽しめる、五感で楽しむ演劇。障害がある子どもを対象に上演されている。

「フェスタ！」の出演者と一緒に、感覚を刺激する素材や、楽器を使って遊べる場を設けました。

5 参加者アンケートより

(1)ワークショップについての感想

・対話の場とあそびの場が隣り合わせで、お互いが邪魔せずに活動できており、会場の空間づくりが良かったです。
・子どもが自由に遊べるのが良かったです。
・「対話の場」のおはなしに参加しましたが、「あそびの場」の太鼓の音が入って説明が聞きづらく感じました。
・「あそびの場」の打楽器はやめた方が良いのではないでしょうか。
・会場が明るいため、スクリーンが見づらいと思いました。
・たまたま子どもと通りがかり、遊ばせていただきました。お絵描きなど楽しめたのでよかったです。
・とても刺激になりました。障害のある方と接する機会がないので、よかったです。
・知らないことを学べる貴重な機会をありがとうございました。
・当事者の方々のお話がとても参考になりました。
・スタッフさんの配慮のおかげで異年齢の子も楽しく遊んでいました。
・すんぷちょの及川さんのお話で、子どもの原体験から文化資本がつくられるというお話に、その通りだなと思いました。また、柴崎さんのお話で、リラックスコンサートについては、より多くの機会の場があればいいなと思いました。
・舞台芸術（ミュージカル）を習っている甥達がとても生き生きして歌ったり、踊ってくれていいなと思っています。柴崎さんのお話、感動する所がありました。
・人々のアートと社会のかかわりについて新しい試みが展開されると楽しいと思います。
・もっと障害別に聞きたい部分がありました。アートの何を欲しているのか障害者の心の内を考えていきたいです。
・アートがテーマでしたが、みなさんのお話を伺って文化芸術が様々な分野（教育・福祉など）につながっていて、難しいことですがアートをきっかけとして他の部分の問題解決につながるように思えました。
・情報発信されていても、そこから探すことも難しい、うまく届いていないと思います。また、みんな様々な思いや考えがあることをあらためて感じました。バリアフリーについても考えさせられました。
・皆さんいろいろと活動なさっている状況がわかりましたが、その情報が市民のどのレベルに届いているのでしょうか？いろんな手段で、情報を伝える努力をしてほしいです。
・「アートを通して障害者の幅が広がる」との内容のように感じたのですが、チラシとのギャップを感じました。
・難しかったです。
・もう少し時間があったほうが良かったです。

(2)仙台市が今後、文化芸術面で力を入れるべきと思うことや、文化施策に関する意見、要望について

・国の補助金がなくなった後もアウトリーチの拡充を継続することが大切だと思います。
・情報発信の方法について、チラシを学校などに配るだけでは届かないです。沢山あるものの１枚と感じます。特別支援学級だけでなく、もっと広く知らせてほしいです。役所や市の施設に出向かないと知ることが出来ない、どこに聞けばよいのかわからない、ということが多いです。もっと SNS やメディア発信も必要だと思います。
・広報活動が不十分だと思います。（市民の立場から見てほしいです。）
・私は自宅で絵を描いていて、家にややひきこもりがちになり、元気をなくすことがあるので、メールなどでイベントのお知らせなどをくれるエイブル・アート・ジャパンさんがいて有難いです。
・情報発信とメニューを充実させてほしいです。
・リラックスコンサートは数を増やすといいと思います。
・アートの発表や場所が多く開放されると理解が深まると思います。
・こういう機会がもっとほしいと思います。また、市・県の教育機関がもっと下におりて、学芸員の活動に期待したいです。
・まずは、仙台市役所の中で連携して行ってほしいです。
・県との共働をお願いしたいです。
・いろいろな支援を仙台市内にとどまらずに県内、県外に進めてほしいです。
・学校の部活動地域移行が話題になっていますが、文化芸術の活動の場が各地域に存在し、子供達が自由に参加できる環境が整えられると良いのではないでしょうか。
・子供に芸術を説明できる親が必要だと思います。
・家庭環境に関わらず、全ての子どもが文化芸術に触れられる仕組み作りが必要と思いました。
・教育も同じだと思いますが、文化芸術面は効率化や生産性では測れない価値を持っていると思うので、その価値基準ではないところで、人間に何が必要か、子供達に何が必要か考えてハードも設計していってほしいです。またその運用も消費者に市民がなるだけでなく、サービスを受けるだけではなく、自分達のものだという主体的な関わりができるようなしくみで運用していけると良いと思います。人と人がつながれることがこれからの時代には必要だと思うので、そういった機能もできるような場になると良いと思います。
・これからの仙台市を担う若い方々をどう育てるかがやはり重要だと痛感しました。
・関わるきっかけのハードルを下げ、生活の中にアートがある環境をつくることが必要と思います。
・障害者割引（美術館、博物館、映画）が助かっています。